



ヴェスパシアヌスは、北からエルサレムに向かってドンドン南下して行きます。ユダヤの町を一つひとつ撃破して、最後に残ったエルサレムには兵糧攻め。戦争が始まって3年。もう食糧も水も無い。供給網が無い。エルサレムの中は生き地獄みたいな様子になってたんですね。伝染病が蔓延し、餓死者が続出する。“こんな所にずっと居たら死んでしまう！”脱走したい人たちもたくさんいたんです。しかし、それは許されませんでした。

当時 エルサレムを押さえていたのは、ユダヤ過激派/熱心党とかシカリと言われている人たちで、脱走を許さない。もし脱走しそうだと分かると、城壁の高い所に連れて行かれて、生きたまま落とされるんです。なので、城壁の外には恐ろしいローマ、城壁の中にはもっと恐ろしいユダヤ過激派がいたということなんですね。

そういう 行くことも退くことも出来ないエルサレムの中に、1人のユダヤ教のリーダーがいました。ヨハナン・ベン・ザッカイという人です。彼は様子をずっと見ていて、もう先が見えたんです。「この戦争は負けだ。どう抵抗しても我々に未来は無い。このままならローマに滅ぼされてしまう。エルサレムが滅ぼされる…それはもういい。エルサレムの神殿が炎上する…それももういい。たくさんの方が死んでしまう。殺されてしまう…それもやむを得ない。生き残った人たちはローマによって国を追われ、世界中に散らされることになるだろう。」

彼は生き残った人たちのことを考えたんです。そのユダヤ人たちは世界中に散らされて、ローマの文化圏の中に散り散りバラバラになるわけですね。その時、ユダヤ教の中心的研究施設がなければ、異邦人の文化の中で同化してしまい、塗り潰されてしまい、ユダヤ人としてのアイデンティティーを失ってしまうことになるでしょう。

「彼らが散らされた後、いつでもユダヤ教の中心的思想を解釈し、発信し続けるような学問の中心の場所をどうしても残さなければならない。それさえあれば、ユダヤ人たちはまたチャンスがある。ユダヤ人として生き残ることが出来る。ユダヤ人の学問の中心・ユダヤ学門研究センターを何としても作るために、私はここで死ぬわけにはいかない。」

それで、生き残る戦略を考えました。時はAD68年。数人の弟子たちを集めて、ヨハナン・ベン・ザッカイは言いました。「私をぐるぐる巻きにして 棺の中に入れて 蓋を閉めなさい。そして、エルサレムの人々に向かって、泣きながらこう言うのです。『私の先生が死んでしまった！伝染病に罹って死んでしまった！』」

エルサレムを牛耳っていた熱心黨員たちも、伝染病で死んだ遺体については、城外に運び出すためにそこから出ることを許可していたんです。そうでなかったら、病気が伝染し蔓延してしまって、病気で滅びますよね。そこで、「私の偉大な先生が伝染病で死んでしまったんです！」と弟子たちが大騒ぎをして、衣を引きちぎって、灰をかぶって、嘆いて。

熱心党の人たちは「分かった。分かった。遺体を運び出すのはオーケーだ。出て行きなさい！」許可しました。そしてローマも、死体の埋葬のために外に出て来た人たちを攻撃しなかったのです。死体の埋葬については、それを尊重したんですね。紳士ぶりをそこで見せつけたわけです。

ヨハナン・ベン・ザッカイは棺に入れられ、弟子たちに担ぎ上げられて、ヴェスパシアヌスがいるテントの所まで運ばれました。テントの中に入ると、棺が置かれて蓋が開けられる。中からヨハナン・ベン・ザッカイが出て来て、こう言うんですね。「閣下、私はどうしても閣下にお伝えしたいことがあります、ここまでやって参りました。」命懸けで来たんですから、どうしても言いたいことがあったんでしょう。

「よい。言ってみよ。」「閣下、私は神によって預言する力が与えられております。閣下、あなたは間もなくローマ皇帝になります。あなたがローマ皇帝になった暁には、その権威をもって、どうぞ私どもの願いを1つだけ聞いていただきたいのです。ユダヤ教の学門研究センターを作るために、小さな町を用意して下さいますか。ユダヤのどこか小さな町で、ユダヤ学門研究所を作ることを許可して下さいますか。」

ヴェスパシアヌスはちょっとビックリするんですね。皇帝になるということもビックリしますが、それはおべっかかもしれない。

だけど、どうしても聞いて欲しい願い事というのが、「神殿 焼かんといてください」とか「みんな赦してやってください」ということじゃなくて、「学校を作ることを許可して下さい。」

「そんな些細な願い事のために、命懸けてここまで来たのか。分かった。お前が言った言葉がその通りになったら、その暁には学校を作ることを許可してやろう。」

果たして、ヴェスパシアヌスが皇帝になったんですね。これは、ヨハナン・ベン・ザッカイに超能力があったんじゃないんです。その当時、エルサレムにローマからもたくさんのユダヤ人がどんどん入って来て、彼はローマで何が起きているかの情報に精通していたんです。

AD68年に皇帝ネロが死んだ。死んだといっても自殺なんですね。

あまりにも横暴でムチャクチャやったので、とうとうローマの元老院が“こいつ、もうアカンわ”と、次の皇帝を勝手に選んでしまうんです。それが分かったネロは恐れをなして、奴隷と一緒にある町に逃げるのですが、追手がドンドン近づいて来る、その音が聞こえて来た時怖くなって、剣で自分の首をグッ！突いた。しかし、死にきれなかったので、最期は奴隷に止めを刺してもらったんですね。

皇帝ネロが死んだ後、なんと1年間に3人も皇帝がコロコロ代わるんです。

1人目の皇帝は元老院に選ばれた人だけど暗殺されました。2人目は在位95日で自殺。

3人目は生きてまま川に投げ込まれて溺死させられています。

この3人には共通点があるんですよ。何かというと、リーダーの器じゃない。

“皇帝になったら何かエエコトあるんちゃうか。”欲の皮の突っ張った奴らでね、品性下劣。欲の塊。“その地位に就いたら自分のやりたい放題が出来る”という一心で皇帝になるような人物だったので、皆からそっぽ向かれて、結局ローマは内乱状態。むちゃくちゃ。

ヨハナン・ベン・ザッカイはそれを全部知っていたんです。

この内乱状態のローマを抑えるためには武力が必要。一番強い将軍が必要とされるんです。

ローマの将軍の中で一番強い将軍は誰ですか？ ヴェスパシアヌスですよ。だから、この人物が皇帝になるに違いないと踏んだんですね。その予測は見事に当たったのです。

さて、ヴェスパシアヌスは皇帝になるためにローマに戻りました。ユダヤ戦争の継続は自分の息子に後を託すんですね。この息子こそは、前回の動画で紹介したティトゥス将軍です。

ヴェスパシアヌスは皇帝になった時、ヨハナン・ベン・ザッカイとの約束を果たしました。エルサレムの北西の方にヤブネという小さな町があります。そこにユダヤ学門研究所を作ることにしたのです。このユダヤ学門研究所を“イエシバ”と言って、今は“ユダヤ宗教大学”と翻訳されることがあります。

イエシバが、国を失ったユダヤ人たちの精神生活の中心、ユダヤ教で最も権威ある機関となったんですね。ここでの発令・ここでの律法解釈・ここでの決まり事が、世界中全てのユダヤ人の精神生活の規範となっていたのです。

ところで、ヤブネのイエシバ、ここで様々な研究書が作られていきました。

ミシュナとか、色々な口伝律法が文書化されるのもここが中心です。

そうしてここで、祈祷書というのが作られたんです。祈祷は祈りという意味ですよ。

祈祷書は祈祷文を書いた本のことで、“こういう内容を祈りなさい”という祈りの文章、祝福の祈りという18くらいある祈りの文章も考えました。

その12番目に「背教者を排除する祈り」があるんです。

全体のタイトルは「祝福の祈り」ですが、ハッキリ言って呪いの祈りなんです。

いったい誰を呪っているのかというと異端者。異端者とはナザレ人たち。ナザレ派を呪う祈り。

ナザレ派とはイエス・キリストを信じるユダヤ人グループのことです。イエスはナザレという村で育ちましたね。ですから、ナザレ派とはイエスを信じるユダヤ人グループ。

当時ユダヤ人には、パリサイ派・サドカイ派・熱心党・ヘロデ党など色んなグループがありました。その中の1つにナザレ派があったんですね。このナザレ派を名指しして、“こいつらは異端だから、呪われてしまえと祈りなさい”という祈祷書なんです。

なぜ「呪われてしまえ」と言ったんでしょうか？ イエス・キリストは生前、このように仰っていたんですね。「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たなら、その時、ユダヤにいる人は山へ逃げなさい。」

「エルサレムが囲まれるのは滅亡の始まりだから逃げなさい。」

囲まれているのに、どうやって逃げるのですか？ その囲みが解かれるんですよ。

それについては、前々回の動画で紹介しましたね。

ユダヤ人の中でイエスを信じているナザレ派の人たちも、エルサレム防衛のためにそこにいて一緒に戦っていたのですが、いよいよ全体が軍隊に囲まれるのを見て、「ああ、イエス様が言っていたあの言葉がその通りになった！」ということで、軍隊の包囲が解かれた時、みんな逃げて行ったんです。「それはエルサレムの滅亡の始まりだ」というイエスの言葉を信じて逃げたんですね。

イエスの言葉を信じなかった人たちは踏み止まって残ったんですが、彼らは自分たちを愛国者だと自認していました。民族の中心であるエルサレム神殿がもう最後の最後。

それを守るために我々は命懸けで戦っているのに、ナザレ派の連中と来た日には逃げやがった。

同胞がみんな一致協力して戦っている時に、こいつら逃げやがった。すなわち裏切者である。

その裏切りは何によって起こったのか？「エルサレムが包囲されたら、それはエルサレム滅亡が近づいたのだと知りなさい。山へ逃げなさい」と言ったイエスの言葉を信じたからだ。

すなわち、イエスというのは民族の裏切りをそそのかした悪い奴だ。

そんなイエスを、創造主が送った救い主/メシアとして信じるのは言語道断！けしからん！あり得ないことだ！こんなめっちゃくちゃなことを信じている奴らは、ユダヤ教の風上にも置けない。

彼らは異端である。彼らをユダヤ教の一員と言うことはもはや出来ない。

そして こう言ったんです。「世界中のユダヤ人たちは、必ずシナゴグ（ユダヤ教の集会所）を作ってそこに集まり、そこで律法を守りなさい。律法の解釈については、このヤブネの研究所で語られていることをそのまま信じなさい。」

ユダヤ人がユダヤ人としてのアイデンティティーを保つためには、シナゴグでユダヤ教の生活をするのが決定的に重要だと考えてたんですね。

ところが この呪いの祈禱文の中に、「但し、ナザレ派のユダヤ人がシナゴグに来た時は入れてはならない。もうユダヤ人ちゃうから。」

「全てのユダヤ人はシナゴグに行って律法を学びなさい」と言ってるんです。これがユダヤ人の一体性をますます深めていくから。「但し、イエスを信じているユダヤ人はシナゴグに入れるな！」入れるなどと言った研究機関がユダヤ教の最高権威だったんです。

これがきっかけで、イエスを信じているユダヤ人はユダヤ人ではないということで、ユダヤ教の中から分離。分離というか叩き出されたというか、壁となり、放り出されてしまった。

これが、ユダヤ教とキリスト教が分かれて行く、大きなきっかけとなった事件なのです。

さて、ヨハナン・ベン・ザッカイがエルサレムの城壁の外に出て、学校を作るための準備を始めている頃、エルサレムの中ではいったい何があったんでしょうか？

いよいよ食糧難。いよいよ伝染病が蔓延。そして、前回の動画で申しあげましたように、やがてエルサレム神殿が炎上し、エルサレムの町全体が炎上し、ユダヤ民族は存亡の危機に瀕するわけですね。

この出来事については、イエス・キリストが前もってこのように語っておられました。

ルカの福音書 21 章 24 節 〈聖書 新改訳 2017〉

人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

これはキリストが十字架に掛かる直前に、エルサレムについて預言している箇所です。

“エルサレムはメシアであるわたしを拒んだ結果、最終的にどうなるか”を預言しているんです。

第1番目。剣の刃に倒れる。すなわち、ユダヤ戦争はユダヤ側の敗北で終わる。

第2番目。捕虜となる。ユダヤ民族は自由を失う民とされてしまう。

第3番目。あらゆる国の人々のところに連れて行かれる。すなわち、奴隷として世界中に売り飛ばされてしまう。ヨセフスの『ユダヤ戦記』を見ると、ユダヤ戦争で110万人が亡くなりました。

ローマ兵の死も入れて110万人ですが、殆どがユダヤ人です。

110万人のユダヤ人がこの戦争で亡くなって、生き残ったのはわずか9万7千人でした。

この人々が奴隷としてアフリカに・ヨーロッパに・アジアの方に売り飛ばされていったんです。あまりにもたくさんの奴隷が売りに出されたので、奴隷の値段の値崩れがあったと記録されています。つまり、イエスが語った言葉通りのことが成就したのです。

しかし、そのような悲惨な目に遭ったのは、イエスの言葉を信じなかった人たちだけです。イエスの言葉を信じてエルサレムから遠くの山へ逃げた人たちは、奴隷扱いされることなく、命を落とすこともなかったんですね。

ところで、イエスはエルサレム崩壊について預言しましたが、同時に、その崩壊から免れるにはどうしたらいいかという救済方法についても語っていたんですね。その災難から脱出する術（すべ）についても語っていたのです。

聖書のメッセージには、警告の部分と救済の部分の両方があるんです。預言は非常に恐ろしい内容が書いてありますが、それは警告の部分です。しかし、警告だけじゃなくて、救済の部分が必ず書いてあるんですね。この救済を受け入れさせるために警告があると言ってもいいでしょう。

もっと言ったら、警告の部分が文字通り実現するのを目の当たりにすることによって、救済の部分についての救いも保証されている。警告の部分が文字通り実現したのなら、救済の部分の約束も文字通り成就するということなのです。

私たちは何かを信じる時、信じる根拠が欲しいですよ。言われたことを何でも信じてたら、エライ事になりますよね。今も SNS でフェイクニュースなんかドンドン出て来て、何が真実かを見分けることが本当に難しい時代になりました。真実か真実でないのか、信用に値するのかわからないのか、何をもち、どうやって見分けて行ったらいいんでしょうか？

1つは、その情報を発信している人の、それまでの約束がどれだけ果たされたかということです。この人は何があっても、必ず言ったことの約束を果たしてちゃんと守って来た。そんな実績が十分ならば、今回も信じていいんじゃないかなとなるんじゃないですか？  
ところが、言った約束 破りに破りまくって、今まで約束守ったためしが全くないという、そんな人の言葉を信じるのは難しいですよ。

聖書預言の言葉は、当たったり外れたりする言葉ではありません。100%全部成就して来たんです。1つの例外もなく全部成就して来たんです。警告の部分、全部成就した。  
ということは、警告からの救済の部分についても必ずあるのです。救いが必ずあるのです。聖書の信頼性は、過去に成就した聖書預言によって確認することが出来るんですね。

いかかでしょう。聖書預言をどうぞお調べになって、ここに絶対的に信頼できる言葉があるということを見出していただいたら、それに勝る幸いはありません。

ということで、今日も早口で言ってしまいましたが、まだまだ続きがありますので、またお付き合い願いたいと思います。それではまた、このチャンネルでお目にかかりましょう。さよなら!!